東京大学教養学部 2021 年度　火曜日 2 限目
教員名：Hermann Gottschewski
連絡先：gottschewski@fusehime.c.u-tokyo.ac.jp
科目名：芸術作品分析法 IV
テーマ：バッハのコラール編曲（音楽分析）

2021 年 4 月 4 日　バッハのコラール編曲の概要

1. 声楽を含む作品（主にカンタータにおいて、コラールの中の特定の一節を扱う楽章）

1.1. カンタータの終楽章などとしての単純な四声（混声）合唱曲。前奏、間奏、後奏がなく、ソプラノがコラールの旋律を基本的に「そのまま」歌い、テンポも集団で歌う讃美歌とほぼ同じ。他の声部がそれに和声をつけながら伴奏する。楽器が加わる場合も多いが、重要な役割を果たさない。（バッハの作品には数百種類あるが、このタイプの編曲をこの授業の対象としない。）

1.2. カンタータの（主に）第一楽章に多く見られる、コラールの一節を中心とするより大きな楽章。前奏、間奏、後奏があって、複雑なポリフォニーによって作られる場合も多い。ソプラノが讃美歌の旋律を担当する。（讃美歌を担当する声部を「定旋律（cantus firmus）」という。）定旋律が拡大して（＝大きな音価で）歌われる場合が多い。様々な声部・楽器編成のものがある。一例はこの授業の最初に扱った BWV 1 の第一楽章。

1.3. その他（例えば BWV4 の第三楽章～第七楽章）。検討が必要。

2. コラールに基づくオルガン作品（コラール変奏曲）
2.1.　バッハ自身が曲集などに纏めたコラール変曲
2.1.1.　Orgelbüchlein（オルガン小曲集）
元々164 曲のオルガン前奏曲集として計画されましたが、45 曲作曲された段階で未完で終わった。この曲集の多くの曲にはメロディーがソプラノで通して弾かれ、それにさまざまな伴奏が付けられる。バッハのオルガン編曲の中で一番小規模のものです。

2.1.2.　Clavier-Übung 3. Teil（クラヴィーア・ユーブング第３篇）
バッハの一つの大作であるクラヴィーア・ユーブング第３篇には他の曲も入っていますが、21 曲のコラール編曲が主体となっています。そのなかには一つの手鍵盤で引ける小規模の「小コラール」と、ペダールと（多くの場合二つの）手鍵盤を使う大規模の「大コラール」が並んでいます。クラヴィーア・ユーブングは全体として一つの大構造なので、そのコラール編曲一つ一つを解釈するためにも作品集全体を見る必要があります。

2.1.3.　18 Choräle（18 のライプツィヒ・コラール）
若い時の作品を改めて手を加えて、ライプツィヒ時代に出版を準備し、未完で終わった曲集。その中にさまざまの種類の編曲が含まれていますが、大規模の編曲が多い。

2.1.4.　6 Choräle（シュープラー・コラール集）
発行者 Schübler から名付けられるこの曲集はオルガンのためのオリジナル曲ではなく、カンタータからの楽章をオルガンのためにアレンジしたものです。その中に原曲が特定できるものは５曲です。

2.2.　　コラール組曲
バッハのオルガン作品でコラール組曲と呼ばれるのは実は「変奏曲」（一つのテーマがさまざまな様に編曲され、一つの組曲をなす作品）です。全部で５組残っているコラール変奏曲には若い時の作品４組と晩年の作品１組があります。一組に含まれる編曲の数は 5 から 11 までです。

2.3.　　単独で伝わっているコラール
単独で伝わるコラール編曲はかなり多くの数がある。それ中にはバッハがもともと構成した他の曲集にあった可能性がある曲もありますが、確証できないために「単独で伝わっている」とされています。その種類が多種多様ですが、いくつかの大作以外に初期の試作などの様な曲も少なくありません。

バッハのオルガン作品のなかにコラール編曲が（演奏時間が短いために）大多数を占めていますが、演奏時間から見ても例えばコープマンの全集録音では 16 枚の CD の中に 10 枚近く取っていることから、オルガン作品の中のコラール編曲の重要性が明らかです。